短期集中連載

家族を殺され…「犯罪被害者遺族」という人生

最終回 世田谷一家惨殺事件「遺族」と「元日」

ノンフィクション・ライター 水谷竹秀

そして遺族は老いていく――。あれから22年、世紀の凶悪犯は未だ捕まらない。何も進展しないまま、皆、22年分歳を重ねた。息子夫婦と孫2人を殺され、夫にも先立たれた彼女は卒寿を超え……。犯罪被害者遺族のその後を追う連載、最終回は世田谷一家惨殺事件。

固定電話の呼び出し音がけたたましく鳴る。台所の食卓にいた宮澤節子さん(91)が立ち上がり、少し早歩きで電話台に向かう。

「電話ですよ！」

隣にいる振り込め詐欺対策人形「あんしんみーちゃん」が可愛らしい声を発し、節子さんが受話器を取る。

「ああ、どうも。はい、そうなんです。ええ……」

節子さんが、電話に応対している間、傍で喋り続けるみーちゃん。

「お金を送ってって言われたら詐欺ですよ！　電話でお金の話をしてきたらきっと詐欺だよ！　この電話振り込め詐欺かもしれませんよ！　注意してね。みーちゃんが守ってあげるね」

茶髪を三つ編みにしたみーちゃんは、右胸の赤いハートのライトを点滅させ、警戒を促している。

「すぐに信用しちゃダメ！　警察に相談してね。騙されたらみーちゃん悲しいなぁ。みーちゃんの言うことしっかり聞いてね！」

みーちゃんの「注意喚起」が鳴り止むと、台所は静かになり、節子さんが電話で応対する声だけになる。

「ええ、そうなんですよ。天気で良かったなあと思っているんですけど……」

定価6800円のみーちゃんは数年前、節子さんを気遣った友人がプレゼントしてくれた。節子さんは現在、埼玉県さいたま市の自宅に一人で暮らしている。

「こんなに可愛いんですけど、電池が何本も入っているから重いんですよ。こうやって喋ってくれることで、電話の相手から『お客さんがいるの？』って聞かれるんです。私が一人じゃないって思うんですよ。だから今はこのみーちゃんに守られています」

そうこうしているうちにまた呼び出し音が鳴り響き、みーちゃんが「電話ですよ！」と喋り始める……。

1年前の2021年12月30日は、節子さんにとって慌ただしい一日だった。午前中は同県新座市にある墓園で、息子のみきおさん(44)＝死亡当時＝ら一家4人が眠る墓にお参りをし、正午前に帰宅。昼食を即席そばで済ませ、食卓で休憩していたところ、早速、墓参を取材していたテレビ局のスタッフから電話がかかってきたのだ。なんでも、墓園の名前を放映していいかどうかの確認だという。そのほか友人も含め、この日は電話が5件かかってきた。いずれもみきおさんら4人の命日に合わせ、節子さんの様子を尋ねてきたようだ。その合間には、宅配便で仏花も届いた。

命日のある年の瀬は、メディアからの取材や警察の訪問などが相次ぐために忙しくなる。しかし、節子さんの普段の生活は、閑静な住宅街に一人きりで暮らす高齢者、「おひとり様」の姿そのものだった――。

みきおさんと妻の泰子さん(41)＝同＝、長女にいなさん(8)＝同＝、長男礼君(6)＝同＝の一家4人は00年12月31日、東京都世田谷区にある自宅で、何者かに殺害されているのが見つかった。20世紀最後の日に一家4人全員の命が奪われたとあって、事件は日本社会を震撼させた。

体の衰え

犯行時間帯は30日深夜から翌未明にかけて。犯人は犯行後、そのまま長時間現場に居続け、冷蔵庫に入っていたアイスクリームを素手で絞り出して食べたり、みきおさんのパソコンでインターネット検索をするなど、「余裕」を感じさせ、その奇異な行動に世間の注目が集まった。

31日夜、節子さんは帰省先の岩手県を出発し、訳もわからないまま親戚とともに車で埼玉県の自宅へ向かっていた。義兄に年越し料理を作るため、台所に立っていたところ、突然、

「とにかく今から帰る準備をしてほしい」

と別の親戚から伝えられ、車に乗った。その途次、ラジオで事件の報道が流れた。

当時の緊迫した様子が、節子さんの手帳のカレンダーにはこう綴られている。

〈急遽埼玉へ（一家全滅）とのしらせ　夜中○○ちゃん○○姉さん（注・手帳では実名）におくられて　信じられないママ――〉

ボールペンの字は、微かに震えている。

〈明け方埼玉へ着　どうしようもなし　○○家夫妻も見えていてくれる〉

これが元日の走り書きだが、2日以降のメモからは、親族が次々に埼玉の自宅へ駆けつけた様子が窺える。

告別式は、事件発生から2週間後の13日に行われた。〈告別式（お坊さん5人とのこと）　各々1000人

みずたに・たけひで　1975年生まれ。上智大学外国語学部卒業。2011年、『日本を捨てた男たち』で第9回開高健ノンフィクション賞を受賞。10年超のフィリピン滞在歴をもとに「アジアと日本人」について、また事件を含めた

以上参列とのこと　報道人と接しないようにすることの大変さを思う〉

「とのこと」と、誰かから伝え聞いたような表現が目に付く。事件直後からしばらく節子さんの記憶が消えているためだ。

「元日に自宅に着いて、2階へ上がって寝かされたらしいんですけど、その辺りから覚えていません。お葬式も皆さんがやってくれたみたいで、誰が来たのかも分からない。（事件の衝撃で）おかしくなっていたんじゃないかなと思います」

事件現場からは、指紋や血痕のほか、犯人が脱ぎ捨てたトレーナー、靴、帽子などの衣類一式、犯行に使われた柳刃包丁などの遺留品が見つかった。それだけ多くの証拠が現場に残されていたにも拘わらず、犯人は未だに逮捕されていない。

「遺留品とか色々あったっていうから、早くに解決できると思っていました。警察だってそう思っていたかと。なんであんな可愛い子供たちまでが……。私が生きている間に解決しないかなと。そればっかり毎日考えているんですよ」

あの日から22年が経とうとする2022年の暮れも、節子さんは自宅の仏壇で一人、祈り続けている。

事件発生時は、夫、良行さん（享年84）との2人暮らしだった。その良行さんが12年9月に肺炎で亡くなってからは、ひっそりと年金生活を送っている。2階建ての一軒屋に一人でいると、おひとり様なら誰もが感じるような不安が、否が応でも脳裏をよぎるという。

「毎晩寝るときは、このままこの世からいなくなることだってあり得るなあって思っています。特に体の具合が悪いところはありませんが、気持ちとしてはそう感じています。前は一人で出歩くことができましたが、今は心配で。どこかでつまずいて転んだら、周りの人に迷惑をかけるんじゃないかと」

遺影と恐竜記事

節子さんの起床時刻は午前7時から8時。日課はまず、新聞受けに朝刊を取りに行くことだ。食卓に朝刊を置くと、トイレへ行き、洗面所で顔をさっと洗う。続いて仏間へ入り、小壁に掲げられた5人の遺影に向かって挨拶をする。

仏壇に供える水を取り替えたら朝食だ。メニューはいつも、食パン1枚の半分を焼き、マーガリンをつけたものと、お新香や茹でたほうれん草などのおかず。飲み物は、夏でも温かい緑茶と決まっている。

特に最近は体の衰えを意識するようになった。その小さく丸まった背中に、笑うとくしゃくしゃになる顔のしわ一本一本が、91年という人生の「年輪」を刻んでいる。

「力の要ることがこの頃できなくなってきたんです。瓶の栓が抜けない。そのぐらい力がなくなる。歳を取るってこういうことだなって、本当に感じますね」

「音がないと寂しいから」

食べる時は、テレビのチャンネルをニュース番組に合わせる。新聞にも目を通す。食後は、高血圧と狭心症の薬をそれぞれ1錠ずつ服用する。それからお昼までは、洗濯をしたり、雑誌を読んだり。

「前は洗濯を毎日やっていたけど、今は2日か3日に1回に減りました。2階まで上がるのが大変な時は、風呂場の乾燥機を使います。でも日光に当てたい時は2階のベランダに干しますね。お日さまが大好きですから」

昼食はじゃがいもを蒸したものや焼き芋、お菓子などで簡単に済ませる。午後1時からは『徹子の部屋』だ。

「昔懐かしい人が出ていると、あー、お元気だなって思いながら観ています」

その後も新聞や雑誌に目を通したり、食卓に10冊以上並ぶ「ナンプレ」（数独パズル）の問題を解いたりして過ごす。夕方には庭の花に水をあげる。

新型コロナが流行して以降は、外出がめっきり減った。普段、会う人と言えば、週1回ペースで訪ねてくる姪と、警視庁元捜査員の女性らほんの数人だ。姪はいつも、漬物や煮物、煮魚などの差し入れを持ってきてくれるため、節子さんはほとんど料理をしない。

「ご飯は炊きますが、おかずは姪の手作りの物で済ませます。近所の方にはゴミ捨てを手伝ってもらったり。まめに面倒を見てくださる人がいて、本当に皆さんにお世話になっています」

とはいえ誰とも会わない日も多く、電話もかかってこなければ、一日中、人と口を利くことがない日も珍しくない。だから節子さんは、仏間の遺影に語り掛ける。

「今日は寝坊助だったよ」

「明日は○○さんが来てくれるよ」

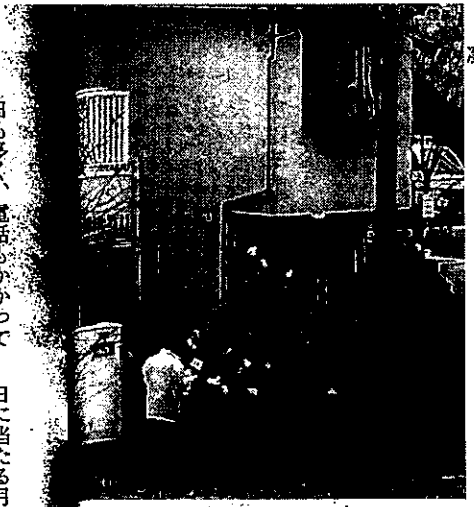
「おやすみ」

返事はない。

成績優秀だったみきおさんは東京大学農学部を卒業後、外資系の大手企業で働いていた時に事件に遭った。子供の頃から恐竜が好きで、大人になってからも本を買い集めていた。節子さんは、新聞で恐竜に関する記事を見つけると、その度に切り抜き、みきおさんの遺影に向かって「最新情報」を報告する。

にいなさんの同級生からは今も手紙が届き、その都度、「来たよ！」と伝える。

微笑むにいなさん、礼君の遺影を見ながら、節子さんは、2人のお守りをしていた当時を懐かしむ。みきおさんの妻、泰子さんは生前、小さな塾を自宅で開いていた。節子さんは、塾の



凄惨を極めた現場

日に当たる月曜と木曜は埼玉の家から世田谷まで通って、2人の孫の面倒を見ていた。みきおさんの自宅に近づくと、待ちきれなくなった2人が玄関から勢いよく駆け出してきた。

「ちっちゃいおばあちゃん！って言いながら。必ず『ちっちゃい』をつけるんです。私、背が低いものですから。でもあの子たちがいなくなって以降は、お守りに行かなくなったからこっちの家にポツンとするようになって。それで私が寂しがっているのではないかと、お父さん（良行さん）が気を遣ってくれました」

孤独死を覚悟

良行さんは事件後、孫2人と一緒に遊んだ上野動物園や大崎公園に連れて行ってくれた。みきおさんが生まれて初めて歩けるようになった、小石川植物園にも足を運んだ。

「みきおを産む時は、死ぬか生きるかの難産だったから、何しろ成長が遅かったんです。1歳半になっても歩けず、植物園に行った時にお父さんが買ってきた靴を履かせました。芝生に立たせると、そこから離れて『とっとっと』って歩いたんですよ。うわー歩いた！歩いた！って大騒ぎして喜んだ思い出の場所です」

子供たちの足跡を辿る旅をともにしてくれた良行さんの行動が、節子さんの心に沁みた。

そんな妻思いの良行さんが一度だけ意を決したように、捜査本部のある成城警察署の講堂で、署員に向かって講演をした。事件発生から約6年後の06年秋のことだ。

「あの4人がうちの宝だったわけです。本当に私の思うような家庭生活をやっていて（中略）それがこの事件でもって奪われてしまった。悔いてもしょうがないんですけど、残念、無念という思いはあります。ただ、人の幸せを断りもなく奪う犯人は必ず、逮捕され、裁判を受けて罰を受けるべきだというふうに考えています」

演壇で嗚咽しそうになるのを堪えながら、声を絞り出していた。その願いは未だに叶っていない。

良行さんは体調を崩して入院するようになって以降、節子さんをこの世に一人残してしまうことに不安を募らせていたという。

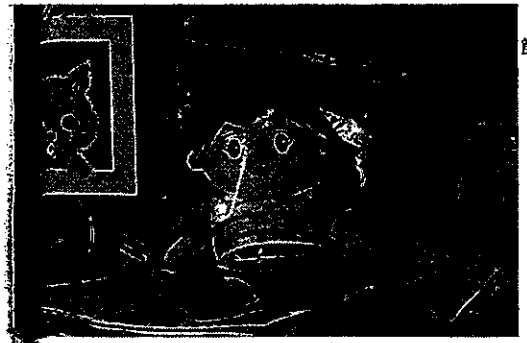
「だからお父さんには（あの世で）心配させないようにしたいんです。そのためにも、生前と同じように、遺影に話し掛けるんです。それに……。本当に口を利かない時がありますから。訪問者もなく、電話も鳴らず、外出もしない。全て重なる日には、気を紛らわせるっていうか。表に出て蟻がたくさんいたら、なんでこんなところにいるの？と思わず独り言が出ますね」

最近はデイケアセンターに通い始めた。

「居心地はいいですね。助かります。皆さん送り迎えしてくれる方が家族にいるんですけど、私は一人だからセンターの送迎で通っています」

身近にいる人の「現実」を目の当たりにしたこともある。節子さんは自宅近くの公民館で茶道と華道を習っていた。その道ともに30年と長く、特に華道は、師範の資格を持っているほどの腕前だ。それほど思い入れのある習い事も、事件後は足が遠のいた。

「事件があったからしばらくは休んでいたんです。でも家にいるのもなんだかなと思い、気を紛らわそうと久しぶりに顔を出したら、みんなから驚かれて。そんなに早く出られるようになるとは思わなかった、という反応をされまして……」



節子さんに寄り添うみーちゃん

そして習い事にまた顔を出さなくなった。すると一昨年、茶道仲間だった1人から、先生が孤独死したことを知らされる。

「先生には子供さんが2人いたんですが、東京へ出て行ったので一人暮らし。その知らせを聞いて、先生の家に行ってみたんです」

節子さんの自宅からは徒歩圏内の場所にあった。大きな屋敷のような家で、植木が茂りっぱなしだった。長らく手入れがされていなかったのだろう。

「家の中に誰もいないんだなって思って。事故物件扱いになるから売るのも大変なんですって。私より若い先生だったのに、なんで亡くなってしまったんだろうと、寂しくなります。自分も一人ですから。知っている方までがそうなると、身に迫って感じてしまいます」

儀式

そんな節子さんと、取材の延長線上で何度か夜ご飯を一緒に食べたことがある。

冒頭で触れた21年12月30日は、出前を頼める店が休業していたため、「レンチン」でできる即席の天丼を用意してくれた。その準備を2人でしている時に、節子さんがこんな言葉を口にした。

「いつもは一人でご飯を食べるから殺風景ですよ。だから作る気もしないっていうか……。元々、料理がそんなに好きじゃないから、間に合わせでいいんです」

そしてこうポロッと言った。

明日は我が身。節子さんはしみじみ語った。

「だから寿命ってわかんないなあって。自分も孤独死を覚悟しなきゃいけないって思いました。無事が何よりっていうか。今日も無事だったって思えるのが幸せなんですよね」

「よかったなあ。今日は一人じゃない」

節子さんは、ホッとしたような表情を浮かべていた。

「本当にそう思いますよ。私なんかはもうおしまいが近いから、寂しいもんです。だから誰が来ても、食事はしていきなさいって声をかけるんです」

今日は一人じゃない……。

夜ご飯を終え、ナンプレや雑誌に目を通して時間を過ごした後は、食卓で日記と家計簿をつけ始めた。今の自宅に住んでからだから、もうかれこれ40年続けている日課だ。メガネをかけた節子さんは、首を直角に曲げ、ボールペンを持つ右手をゆっくり動かす。そして午前0時を過ぎると いつもの「儀式」が始まる。

「みきおたちが亡くなって、1、2年経ってからやり出したんです。今日も警察から連絡が来ないなって。カレンダーに定規をあてがって、日付の角と角を結ぶんです」

台所の冷蔵庫に、そのカレンダーが貼ってある。時間になると、節子さんは冷蔵庫の前に立ち、プラスチックの定規をあて、鉛筆で斜線を引く。

「やり始めて最初の何年かは悲しみながら引いていました。でもそんな私の姿を見たら、あの子たちも悲しむんじゃないかと思い、努めて明るくするようにしました。もう20年近くこの線を引いています。今日も逮捕の連絡なかったなあって思いながら」

「12月30日」に斜線が入った。翌日の大晦日は、年が明けてから引くことになる。外は除夜の鐘が鳴り響き、世間が年明けを祝うムードに包まれている中、節子さんは1年の締め括りとして、その儀式を行う。

「今年も全然タメたったなあって。そしてまた新たな1年が始まるから、今年はどうだろうって。私は元日に『おめでとう』って言わないの。言えないもの。だから近所の人とも元日は顔を合わさないです」

あれから22年。

2022年12月半ばの事件解決を願う集会は、7年ぶりに世田谷の現場近くで開かれた。寒空の下、喪服姿の節子さんは、4人の遺影に向かって白い花を手向けた。その後ろには、現場の家が今もひっそり残されている。

「家のそばに来るのも恐いんです。2人の孫が飛び出して迎えに来てくれた姿が、今はもうないのがすごくこたえます」

ほんの数十メートルの距離にあるみきおさん一家の家を、節子さんは未だに直視できなかった。

今年もまた、「おめでとう」が言えない元旦を迎えてしまうのだろうか。

今日も節子さん宅では、みーちゃんが「電話ですよー」と喋り続けている。